

# 『一心千里』

## 走ってれば、 見えてくる

永田 隆一



第77回

わが国の労働生産性はOECD加盟国34カ国で21番目です。労働生産性とは、人件費・利益などの付加価値を労働した人数で割って算出されます。6位の米国に比べても、製造業で7割、サービス業で5割飲食・宿泊は2割5分でありま

今後、筆者が日本の一番の課題と考えます生産人口(15~64歳)の大きな減少が追い打ちをかけます。1970年720

が300万人います。総労働者の8%という割合は、先進国に比べても多くはない割合ですが、給料が2倍と高いのです。

③国の規制、指導という産業政策が後手を踏み、市場では厳しい過当競争が出現しておりま

最近では、驚くほど廉価で効率化をサポートしてくれる情報技術、分析・解析・見える化・予想

「マーケティングは3Cで考えられると言います。自分の会社(カンパニー)、お客様(カスタマー)、競合会社(コンペチター)です。自分の能力KSA(知識・ノレッジ)、技(スキル)、能力(アビリティ)と向き合って、自分の会社にどう貢献できるかを考えてみる必要があります。競合する企業の製品やサービスと対比して、付加価値で優位に展開するための戦略や機能、コストパフォーマンスを考えます。

## わが国の労働生産性はなぜ低い 時間あたりの生産性に注目する

長時間働いて、給料も利益も低いということ

0万人、95年8700万人、97年から減少して、2020年に7400万人、55年には5500万人となります。

①公務員の給料の高さ。日本の国家公務員は60万人、地方公務員270万人、そして国公立の大学、病院、図書館など

④労働者の市場における流動化が充分ではありません。また、過去25年、企業の起業率を廃業率が上回っている点も課題であります。

⑤経営陣も労働者も賃加工的な発想に縛られている場合が多くあります。自社の製品やサービスを市場価値、競争力という物差しで考えて付加価値を増加させる、あるいは値上げのトライをす

お客様の享受できる利益という物差しで、どのような付加価値をいくらで提供すれば喜んでもらうかを考え抜く。そういった先にしか、労働生産性を向上させる王道は存在しないと、筆者は考えます。

時間あたりの生産性(単位はドル)。1位ルクセンブルク92、2位ノルウェー85、3位アイルランド76、4位オランダ67、5位ベルギー66、6位米国66、7位フランス65、8位デンマーク63、9位ドイツ63、10位スイス59……、21位の日本は41。

②学校教育の課題は深刻です。グローバル時代に英語の会話ができない英語教師が教鞭を取っています。企業がどのように利益を出しながら成長するかを教えるマーケティング関連のカリキュラムが充実していません。プレゼンテーション、デ

①労働者の市場における流動化が充分ではありません。また、過去25年、企業の起業率を廃業率が上回っている点も課題であります。

⑤経営陣も労働者も賃加工的な発想に縛られている場合が多くあります。自社の製品やサービスを市場価値、競争力という物差しで考えて付加価値を増加させる、あるいは値上げのトライをす

④労働者の市場における流動化が充分ではありません。また、過去25年、企業の起業率を廃業率が上回っている点も課題であります。

お客様の享受できる利益という物差しで、どのような付加価値をいくらで提供すれば喜んでもらうかを考え抜く。そういった先にしか、労働生産性を向上させる王道は存在しないと、筆者は考えます。

(毎月連載)